

らしく

自分らしく、
粋なくらし

CLOSE UP

「平和」とは何か、今考える 暮らしの中に 感じる平和



特定非営利活動法人これからの学びネットワーク
参加体験型の学びの可能性を最大限に高め、
学びを通じて持続可能な世の中を目指す



ヒバク2世の語ろう会
家族の被爆体験を語り継ぎ、
大切な証言を未来へ繋ぐ



江波山ラジオ体操の会
ラジオ体操を続けて50年以上。
続ける難しさを学び、地域の絆を結ぶ



参加体験型の学びの可能性を最大限に高め、学びを通じて持続可能な世の中を目指す

参加体験型クラブで学ぶ小学生

CLOSE UP

「平和」とは何か、今考える暮らしの中に感じる平和

誰もが、穏やかな日常を送ることができる、平和な世の中を望んでいます。平穏な日々、身近な幸せを守るために、さまざまな活動をしている団体を紹介します。

特定非営利活動法人これからの学びネットワーク

koremana.net/

子どもから大人まで、自ら考え、仲間と協働し実行する、学びの場を提供

持続可能な世の中へ、と国連が掲げている17の目標。理解しているものの果たして私たちに何ができるのか？と思う人も少なくはないはず。そんな中、持続可能な世の中を作るためには質の高い「参加体験型」の学びが必要と考え、平成20年に設立された



▲ 自然体験活動の指導者養成研修の様子

のが「特定非営利活動法人これからの学びネットワーク」です。代表理事を務めるのは河野宏樹さん。環境やまちづくりに関する事業のプロデュース、プログラム開発、指導者育成などを専門とし、7人の理事と運営しています。

来広する修学旅行生を対象に、平和学習を行うことからスタートし、大学と連携したボランティアや体験活動、小学生を対象としたさまざまな参加体験クラブ、教室を飛び出して行く自然学校など、設立以来「もっとこんなことも」とスタッフの思いが形になり事業は拡大していきました。「子どもたちにはとにかくたくさん体験してほしい。言葉も大切ですが体験して学ぶことって尊いんです」と話す河野さん。

現在、平和学習事業、自然学校事業、放課後児童クラブ事業など7つの事業を展開。例えば、五日市小学校区2箇所で開催している、放課後児童クラブでは、放課後や長期休暇中の児童の体験や学びをサポート。主に土曜日や長期休暇中には、人気の参加体験型クラブが実施され、学校、家庭、それぞれの場所で行なっている子どもたちの、第三の場所として存在しています。



▲ 大学と連携して行う事業の様子

ここで教えるのは「比べるのは他の誰かではなく自分」ということ。宿題をする、ルールを守る、これは全て自分のため。「自分が出ているかどうか大切で、自分軸をしっかり持つことに意味があります。そうすると自己肯定感も高まり、他人と比べ苦しみも避けられる。どんな自分でもいいと受け入れ、楽しんでもらえたら」と河野さんは微笑みます。

「そもそも平和ってなんだろう？」を考えるワークショップ

当団体の平和学習事業のひとつ、参加体験型のワークショップ「ピースクリエイターになろう」は、平和について思考を深めることを目的としており、グループワークと個人ワークを織り交ぜた90～120分。経験豊富なファシリテーターがサポートします。オリエンテーションから始まり、世論調査ではインタビュー形式で質問を投げかけ、それぞれが思う「平和」を知る。そして実際の新聞を使って現代社会に溢れる平和的なものと平和的でないものを探り、最後に、自分自身の「ピースクリエイター＝平和を創り出す人」としての第一歩をまとめ「平和」という、あいまいな概念を、身近で具体的な言葉に落とし込みます。

当団体では「学んだことを、自分の日常生活に溢れている出来事や価値観と結びつけることで平和を考えることにつながる」と考えます。戦争の悲惨さを学ぶ



▲ 自然学校「九門明自然学校」(北広島町大朝)の様子

と同時に、いまの自分に置き換えてみる。穏やかな日常こそが平和なのでは？と、自分で気づく。この「自分への置き換え」ができると、想像力が高まり「平和」を身近なこととして捉えることができるようになります。と、想像力が高まり「平和」を身近なこととして捉えることができるようになります。と、想像力が高まり「平和」を身近なこととして捉えることができるようになります。

平和への考え方は人それぞれ。平和について、自分の考えを持つことが、重要だと教えられました。

※「ピースクリエイターになろう」ワークショップのお問い合わせ先 info@koremana.net

特集

01 「平和」とは何か、今考える暮らしの中に感じる平和

▶ 特定非営利活動法人これからの学びネットワーク



広島を訪れた修学旅行生が「ピースクリエイターになろう」に参加する様子

▶ ヒバク2世の語ろう会



3人のミーティングの様子

▶ 江波山ラジオ体操の会



お揃いのTシャツを作り、気持ちをひとつにする皆さん

05 らしっくレポート ひろ記者が行く

▶ マリンパで平和を奏でる 広島ジュニアマリンパアンサンブル

らしっくコラム

▶ 「平和」の小さくて大きな一歩 広島女学院大学 人間生活学部児童教育学科 加藤 美帆 准教授

06 ようこそ！公民館へ

▶ 安佐北区内公民館

07 人材バンク 名人 宝人 達人

▶ 子育て支援・中高齢者の健康生きがいづくり支援 山崎 勇三さん

09 Hm助成支援団体のご紹介

▶ ひやくなん会
▶ 妙聲寺ほのぼの寺子屋
▶ 特定非営利活動法人ここ惚れわんわん
▶ くらりか広島

11 情報の森

15 プラザ通信

家族の被爆体験を語り継ぎ、大切な証言を未来へ繋ぐ

ヒバク2世の語ろう会

亡くなった親族の体験を伝えたい 手法を模索する中で見つけた新たな道

広島市内の被爆2世3人が、被爆した親族の証言を次世代に伝えるグループとして、令和4年5月に設立したのが「ヒバク2世の語ろう会」です。被爆2世3世で構成され、親族から聞いた被爆、戦争に関する話を次世代に残し伝えていくことを目的としています。

会を発足する背景には、被爆者の高齢化に伴い、被爆体験を伝える人が年々少なくなっている中、平成24年度から始まった広島市の被爆体験伝承者養成事業があります。自らの被爆体験等を伝える「被爆体験証言者」と、被爆体験証言者から被爆体験及び平和への思いを受け継ぎ、それを伝える「被爆体験伝承者」制度。さらに令和4年度からは、家族の被爆体験等を受け継ぎ伝える「家族伝承者」制度があり、それぞれ研修を積み重ね、平和記念資料館等で修学旅行生や海外からの訪問者等を対象に講話を実施します。

「新たに始まった「家族伝承者」制度は、存命の家族から体験を受け継ぐことが条件です。家族の被爆体験を知っていても、病氣や死別で認定のための確認が出来ず応募出来なかった人がいる、と言った話を聞き、家族の中に残された記憶や記録、そういった貴重な証言も残さなきゃいけないと思い、はじめました」と代表を務める佐々木佐久子さん。同じ被爆体験伝承者で旧知の水野隆則さん、瀧口裕子さんと会を設立しました。瀧口さんは家族伝承者を断念した一人。7年前に亡くなった、被爆者の母が執筆した原稿や資料などは多くありましたが、家族存命の要件を満たせず、研修への参加はできませんでした。

もうひとつの背景として、被爆者健康手帳を持つ人が、令和3年度末に全国で12万人を割り、広島市内では約3万9千人まで減少。平均年齢も84.5歳と高齢化が進み、被爆体験の風化が進んでいる現実もあります。また平和記念公園内にある「国立追悼祈念館」には、約14万7千人近くの被爆者の方々の手記がある一方で、



▲ 勉強会参加者による講話実習の様子(令和5年1月)

遺族でさえ手記の存在を知らない人がいたり、思いがきちんと伝わってなかったりするので、その思いを知る機会を創出していきたく考えたそうです。

被爆体験伝承者として蓄積した ノウハウを共有しサポート

設立後、毎月2回の勉強会を開催し30代から60代の約20人が参加しています。3人が中心となり、家族伝承者の研修生や、研修会への参加資格を喪失した人に、伝承者として必要な原稿の書き方や、話し方をアドバイス。令和5年3月には、一般市民向けへの講話会を開きました。



▲ 瀧口裕子さん(左)、水野隆則さん(中)、佐々木佐久子さん(右)

「被爆体験伝承者、家族伝承者ともにクリアするための条件(被爆体験証言者や被爆者である親や親戚の体験の聞き取りのほか、伝承する被爆者が講話の内容の確認に協力できることなど)に対応することが難しい場合が多々あるんです。そうすると、どうしても対象外になるケースが出てくる。時間が経過する中、未来に伝え、残さなければならないのに、どのように対応すべきか。活動はジレンマとの闘いです」と水野さん。時代が変化し、証言内容は、主観ではなく、客観的な事実のみ伝えないといけない、それぞれの思いとの矛盾。その矛盾をいかにクリアし、いかに思いを伝えていくのか。年を重ねる毎に、制度の在り方等も変わる中、3人は議論を交わし、進むべき方向を模索しています。

「伝承者として学ぶべき、伝えるべき事はたくさんあります。被爆の実相はもちろんですが、被爆者の家族としてこれまで一緒に過ごしてきた思いも、歴史の一部です。過去を振り返るだけではなく、今、そして未来に向けてそれぞれの家族の生き様をどう伝えていくのか。それも平和へ繋がっていくひとつの手段ではないでしょうか」と水野さん。

3人は今後も、やる気と熱意、そして志を持って勉強会に参加する人を歓迎。原稿を書ける人、上手く書けない人、上手く語れる人、上手く語れない人、さまざまな人がいますが、伝承者として立ち立てるように一緒に学んでサポートしていきたいそうです。

「ヒバク2世の語ろう会」への質問、参加希望の方は、下記へご連絡ください。

事務局 082-843-7814 (13時~18時・土日祝除く)

※留守番電話の場合はお名前・電話番号・メッセージをお願いします。

ラジオ体操を続けて50年以上。 続ける難しさを学び、地域の絆を結ぶ

江波山ラジオ体操の会

1人が始めたラジオ体操 今では100人を超える日も

1年365日、よほどの悪天候の日を除くほぼ毎日、お正月もお盆も欠かさず、朝6時半から江波山公園内でラジオ体操を続けているのが「江波山ラジオ体操の会」です。もともとは、昭和44年に、近隣に勤める人が、毎朝公園内でラジオ体操をし、散歩する人たちにも声をかけたのがきっかけです。以来、1人、2人と参加者が増え続け、54年も続いています。

「今は健康維持、老化予防、地域交流を目的に、毎朝続いています」と初代会長を務めた花本芳雄さん。近頃は、1日平均50人ほどが参加。年齢は70歳から80歳くらいの人が多く、最高齢は90歳。近隣の江波南、江波二本松、江波栄町の住民が中心で、舟入や観音から来る人もおり、松井広島市長も何度も参加されているそうです。

また平成29年から始まった、広島市の「高齢者いきいき活動ポイント事業」*の対象になった頃から参加者が増え始め、多い日は約80人、日曜日や冬場は少ないそうですが、小学校の夏休み期間中は子どもたちも参加して、100人を超える日もあるそうです。発足50年目の令和元年には、ラジオ体操優良団体等表彰を受け、江波山公園内に記念の桜の木を植樹しました。

*「高齢者いきいき活動ポイント事業」とは、広島市在住の65歳以上の高齢者が、自らの健康づくりや地域支援のために行う活動(いきいき活動)を奨励するためのもの。活動実績に基づき与えられるポイント数に応じて、奨励金が支給される。



▲ 節目の50年で「ラジオ体操優良団体等表彰」を表彰される

何気ない日常のコミュニケーションが 地域の絆を結ぶ

「江波山公園を登る坂道は急こう配で、毎朝登ってくるだけでも大変です。常連の参加者に誘われて来る新しい人も、この坂道に挫折して、数日



▲ 副会長の筆谷源之助さん(左)、青木克己さん(中)、花本芳雄さん(右)

参加して来なくなつた人も大勢います。継続は力なり、と言いますが、毎日続ける事の難しさがよく分かります」。参加者は、朝6時頃から集まり始め、ラジオ体操の前には江波山公園周辺のゴミや落ち葉を集めたり、トイレ掃除など清掃活動も行っています。「夫婦で参加する人もいれば、ひとりで参加する人もいます。名前は知らなくても、顔を見ればすぐ分かる。ラジオ体操が始まる前、そして終わった後、みんなで他愛もない日常について話をしたり、カーブ談義をしたり。1年に1回、有志30人ほどでカーブ観戦に出掛けたりと、地域のコミュニケーションの場、絆を強める場にもなっています」と花本さん。普段参加している人が、数日来ないと心配になって、みんなで訪ねて行ったこともあるそうです。

誰もが子どもの頃から親しんだラジオ体操が繋ぐ、地域の絆。時代は移ろい変われど、平和な世の中だからこそできる、日々の営みなのかもしれません。



▲ 参加者が少ない雪の日の様子